

# 人権アラカルト

すべての人が、幸せになる権利を持っています。  
人権について、身近なこと、小さなことから、始めませんか？

## 拉致解決に向けて

2002（平成14）年9月17日に、小泉総理（当時）が朝鮮民主主義人民共和国（以下「北朝鮮」という。）を電撃訪問して、金正日（キム・ジョンイル）国防委員長（当時）と日朝首脳会談を開いて以来、21年の時が経ちました。

1970～80年代にかけて、多くの日本人が北朝鮮に拉致されました。

政府が、北朝鮮による拉致被害者として認定したのは17名。このうち5名は既に帰国を果たしましたが、残りの12名については帰国できていないままです。

北朝鮮は、長年にわたり日本人拉致を否定していましたが、この会談において、初めて日本人拉致を認めて謝罪しています。

小泉総理は金正日国防委員長に対し、継続調査、生存者の帰国、再発防止を要求していますが、45年以上経った今も解決には至っていないのが現状です。

この会談をきっかけに、24年ぶりに故郷の土を踏んだ新潟県柏崎市の蓮池薫さんは、「拉致家族の再会が実現しなければ何も解決しない。」「私の20年より、拉致問題の20年を考えてほしい。この期間、未帰国者の家族はどれだけ大きな苦痛を与えられているか。政府はそのことを認識し、リスクをいとわず問題を前に進めてほしい。」と訴え続けておられます。

私にも家族がいます。父がいます。母がいます。子どももいます。その家族がある日突然、いなくなったらと思うと、ましてや連れ去られたらと思うと、拉致被害者の家族の方々の悲しみ口惜しさ、つらさは想像に堪えません。

1977（昭和52）年11月15日、13歳という若さで拉致された横田めぐみさん。つい15分前までは友達と仲良くバドミントンをしていました。前日のお父さんの誕生日には、「オシャレしてね」とクシをプレゼントした優しいめぐみさん。母の早紀江さんは、めぐみさんの名を叫びながら何キロも海岸を歩き回りました。悲しみの中でも、毎日顔を出す警察官には涙目で「いつもありがとうございます。」と丁寧に頭を下げられていたそうです。

拉致被害者御家族も御高齢となる中で、時間的に制約のある拉致問題は、ゆるがせにできない人道問題です。私たちは「大切な家族を取り戻したい」という家族の切実な思いに寄り添い、国民一人ひとりが関心を寄せ続け、伝え合うことが、この問題の解決に大きな力となるのです。

政府拉致問題対策本部公式動画チャンネル YouTube ⇒

